



霊宝を目前に祖師先徳の想いに触れる参拝者（比叡山国宝殿にて）

「仏身を観るものは仏心を見奉る」

近年、若い方にも文化財修復の関心が高まりを見せ、クラウドファンディング等により文化財が継承され、想いが受け継がれているようです。誠に喜ばしい限りです。延暦寺でも、「国宝根本中堂大改修」が多くの方々の支援を賜り進んでおりますが、この保存修理も先人達の想いを継承することが最大の目的です。一人ひとりの力が大きな実を結ぶ。まさに伝教大師のお言葉「一身并じ難く、衆力成じ易し」の実践とも言えるでしょう。

現存する上東門院彰子が経箱と共に収めた「願文」では、お経の功德や自身の想いが永久に続くことを願っています。「仏身を観るものは仏心を見奉る」と言いますが、我々は文化財に接するとき、「物」としてではなく、先人達の「心」や「想い」を汲み取ることこそその精神を引き継ぐべきではないでしょうか。

この経箱は埋納してあった為、焼き討ちの難を逃れ、発掘後は銅筒と分けて保管してあったからこそ、落雷を免れることができました。これに限らず、我々が博物館等で目にする文化財一つひとつにも色々な物語があり、先人たちが守り伝え今に至ります。現在鑑賞できるのは、言わば奇跡的なことなのかも知れません。

なかでも、国宝「金銅宝相華唐草文経箱」は今でも色あせず、当時の輝きを放ち、多くの方を魅了しています。この経箱は大正十二年、横川の如法塔再建時に発掘されたもので、上東門院彰子（藤原道長の娘・一条天皇の中宮）発願の『法華経』を納めていた経箱です。元三大師の弟子、覚超が記した『如法堂銅筒記』には、長元四年（一〇三二）慈覚大師の如法経やそれに結縁した彰子の『法華経』（経箱）を納める銅筒を造り、如法堂裏に埋納するように記されています。銅筒は発掘の後、横川中堂に奉安されましたが、昭和十七年の落雷により焼失、経箱の中の法華経八巻も朽ちて現存していません。

十一月に入り、山上の木々も一面赤みを帯びて「山粧う」季節となりました。なかでも、横川中堂周辺の紅葉は格別で、この時期山内は賑やかさを増します。さて、十一月三日は「文化の日」、文化・芸術に親しむ日として定着しており、比叡山国宝殿においても開館三十周年を記念して、九月末より十二月初旬にかけて、国宝・重文などの寄託品を一堂に会した特別展「比叡の霊宝」（八月号特集にて紹介）を開催しています。



発行所
比叡山時報社
〒520-0116 大津市坂本本町4220
郵便番号 520-0116
電話 077-578-0001
振替 00970-2-9732
宗教法人延暦寺事務所
定価 1部110円 年1200円

延暦寺広報

叡山講福聚教会
会報
年度会費（3000円）中
に会報（比叡山時報）
購読料を含む。

令和4年比叡山から
発信する言葉
大悲
万行
すべての行いは大悲から

ホームページから



ご購入は延暦寺

地域・行政・寺院が一体となり子育てに取り組む 公開講座でオオムラサキの保護活動を紹介

去る9月30日大津市坂本の天台宗務所で開かれた第1回「隅を照らす運動公開講座」(天台宗 隅を照らす運動総本部主催)にて、三千院門跡(京都市左京区 小堀光實門主 (69)が、三千院近隣の京都大原学院(京都市立大原小中学校・同区・瀬本祐一(校長)の児童・生徒が取り組む、日本を代表するチョウ「オオムラサキ」の保護活動を紹介した。そこで今回は、講演の内容を紹介すると共に、三千院と地域の人々の触れ合い、また地域一丸となつて大原学院の子どもたちを支える活動を取材した。

三千院門跡とは

三千院門跡の歴史は、寺地はその後、時代の延暦年間(782〜806)に宗祖伝教大師が比叡山東塔南谷の山梨の大木の下に円融坊を構えたことに始まります。その後、慈覺大師門仁へ引き継がれた坊は、堀河天皇の皇子である第40代天台座主最誓法親王(1104〜1162)の入室により、平安後期以降、皇子皇族が住する富閑跡の由緒が与えられました。

京の奥座敷「大原」

三千院門跡を擁する大原は、京都市の北東部にあり、比叡山の北西麓に位置します。大原という地名は平安時代初期に慈覺大師門仁が修練道場として開山した大原寺(だいがんじ、勝林院と来迎院の総称)に由来することから、現在でも勝林院門跡の名称の使用も禁



京都の名利の一つに数えられる三千院門跡の往生極楽院

光院など多くの天台宗の名利が連なり、大原は、古くから出家や隠遁の地として知られ、惟喬親王や建礼門院をはじめ、大原三寂(常盤三寂と称された寂念・寂超・寂然兄弟、藤原顯信・西行・鴨長明などが隠遁したと云われます。また平安時代より大原は平安京・近江を結ぶ若狭(鯖)街道の中継地点として栄え、鎌倉期以降には、特産物の紫蘇の葉で漬けた紫蘇漬が、大原女により新に使用する一柴と共に京都へと持ち込まれ、現在京都を代表する漬物「紫漬け」として知られるようになりました。



大原から比叡山を望む 大原学院児童連立



公開講座にて自筆のイラストを披露する小堀門主 (イラストはこの後参加者にプレゼントされた)

午後1時より開始された公開講座では、約100名が聴講するなか、「国蝶オオムラサキ 京都・大原の少年たちの保護活動」と題して、大原地域の人々と子供たちが一体となり小さな命を守る活動が紹介され、あらためて命を尊ぶが講演された。



受賞作のプレゼン動画の完成度一同が感嘆

オオムラサキの幼虫を見つづけるものです。それに比べて大人たちは見つけることが出来ない。子どもたちの純粋さにあらためて感心した出来事でした。と共に、年長の者が年少の子も私たちを慈しみながら手を取り教えている姿を見て「保護活動を通して小さな命を思いやる」素晴らしい活動をもっと広めなければならぬ。そのために認知度の高い三千院から発信することはできないだろうか。自ら宣伝役を買って出ることをお願いしたのです。

「隅を照らす運動公開講座 三千院門跡小堀光實門主」を紹介する。その中で、大原の少年たちが取り組んでいる「命を守る」活動について、大原の魅力を発信している。人間以外の命から人間の命の大切さを伝えること。子供を見守り、現在の成長を知る。そしてその苦勞を厭わない。そのように地域の方々の活動に大変感謝を覚えた。



三千院で展示されるオオムラサキのイラスト

この3の実行を心に決めて三千院へ入りまは「大原のこみについて」というような環境問題や「大原のご当地頂いたお手紙が溜まりお返事をと整理し始めた時、ひと際、寧ろに毛筆で書かれた封筒が目に付きした。そして、約1カ月前、京都大原学院からのお手紙であり、そこには毎年同校の9年生、日、児童、生徒が地域が大原の魅力を発表する「大原提言」へ渡って取り組んでまいっている。お誘い。しなから目にしたのは、サキの保護活動が、第55回全国野生生物保護活動発表大会で文部科学大臣賞を受賞しました。自分自身で決めたのに残念無念。すぐさまは瀬本校長「お返事を書き、一甲の様子を見させていたします」お返事。い「それは大したもんたします」お返事。い「それは大したもんたします」お返事。い

過疎化進む地域で学校を残す決断 小中一貫校 大原学院開設で子供の成長願う 3つの「つきたい力」

京都大原学院は、過疎化と若者の流出により地域文化の継承が困難になつてきた大原で、地域の人が大原に学校を残し、子どもを育てていくことの願いと決意を込め、平成21年4月3日、旧大原小学校・中学校から施設一体型小中一貫校に形を変え開校しました。同院では学校教育目標を「大原のゆとりある心を自信を持って伝えられる子に!」とし、目標達成を3つの「つきたい力」で目指しています。

1、思いやりをもち、自ら汗を流す子
2、科学的思考のできる子
3、コミュニケーション力を発揮できる子の育成



「大原里づくりトライアングル」「大原のオオムラサキを守る会」・行政・地域の人々が一体となり。オオムラサキの観察会・放蝶会を実施



オオムラサキの越冬幼虫を調査

大原提言とは

「大原提言」とは、京都大原学院の9年生、中3年生、小5年生が学校教育の一環で毎年発表しているプレゼンテーションのこと。各々がフィールドワークを実施のもと地域課題を調査し、大原をよ



11月に行われる大原提言に向けプレゼンを猛練習

「大原提言」とは、京都大原学院の9年生、中3年生、小5年生が学校教育の一環で毎年発表しているプレゼンテーションのこと。各々がフィールドワークを実施のもと地域課題を調査し、大原をよ



年長と年少者がともに取り組むことで絆が生まれる。小中一貫校ならではの一幕

「大原提言」とは、京都大原学院の9年生、中3年生、小5年生が学校教育の一環で毎年発表しているプレゼンテーションのこと。各々がフィールドワークを実施のもと地域課題を調査し、大原をよ